

響



ひびき

東信教育事務所
〒384-0006
小諸市与良町6-5-5
TEL.0267-31-0251
FAX.0267-31-0140



令和3年2月15日
No.8



ふれてきた。

はなれていただけ、

ふれていた。

ふれあってきた。

響 第8号「ふれてきた」 -もくじ-

- | | |
|--|-----|
| 1. 子どもがもっと追究したくなるために
～事象提示の工夫と既習事項との関連付け～ | P 2 |
| 2. 個に応じた支援を考える
～教材・教具の工夫～ | P 3 |
| 3. 情報を共有し、つながりで支えていく
～第2回外国籍等児童生徒指導研修会～ | P 4 |
| 4. 1人1台端末は
令和の学びの「スタンダード」 | P 5 |
| 5. ともに考え進んでいく
～学校訪問を振り返る～ | P 6 |

もっと顔を向かい合わせて話したい。手を繋ぎ合って遊びたい。そんなもどかしさの中で、子どもとの関わりやつながりへの自分の思いに、気づかされることがあったかと思えます。

だからこそ、視線を合わせて、ちょっと待ってから、自分の心の内側から、ぐんと、子どもたちの心にふれようと手を伸ばしてきたのではないのでしょうか。



授業から学ぶ

中1年理科
「光の世界」



子どもがもっと追究したくなるために ～事象提示の工夫と既習事項との関連付け～

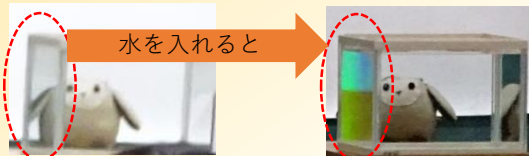
A先生は「生徒の問いを大切にし、生徒の言葉で学習課題を設定する問題解決学習」を大切に授業を進めています。
「光の世界」では、水槽に水を入れると見え方が変わることを導入で提示し、既習事項との関連を想起させた授業を行いました。

事象提示

- 身近な素材を用いて生徒が初めて体験するような事象の提示
- 生徒の「どうして見えなくなるの？」という問いを導き、「解決したい」という意欲につなげる。



水槽の後ろに人形が置いてあります。人形はどの角度からも見えますね。それでは、水槽に水を入れるとどうなるでしょうか。



水を入れたら横からは見えなくなった！
どうして？



学習問題 人形が正面から見えて、横から見えないのはなぜだろうか。

既習事項の確認

- 生徒が自分たちで解決への見通しをもてるようにするため、既習事項の中で解決に必要な学習内容や実験方法を想起できるよう問いかける。



見えていたものが見えなくなるということは、どんなことが関係しているのかな。

光がどのように進んだかを調べるには、どうすればよかったのかな。



これまでに学習した光の屈折や全反射が関係してそうだね。

レーザー光を使って光の進む道筋を調べることができたね。

学習課題 レーザーの光を人形から出る光として考えて、水槽の横に進んだ光の進み方を調べよう。

人形から出た光の道筋が分かればいいんだ。



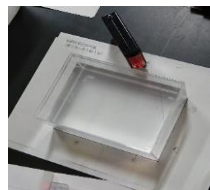
班ごとに小さな水槽と人形、レーザー光を準備しました。調べてみましょう。

< 子どもたちの追究の姿から >

Bさん：「光が全反射して、反対側にいくから見えないんだね」

Cさん：「う～ん、横から見えない理由は分かったけれど、そんな、ざっくりとした答えでは納得いかないな。光がどこからどこへ進むのか記録しないと」

水槽の側面に進んだレーザー光が全反射するから見えなくなることに気付いたBさん。見えなくなる理由は分かったけれど、もっと詳しく調べて記録しようとしたCさん。班の追究は、光の道筋を、より正確に記録することへ向かっていきました。そして、正確に記録ができていないか確かめる方法を模索した末、用紙の上に水の入った水槽を置き、もう一度レーザー光を当てました。



Cさん：「記録した線と、少しずれちゃったな」

Bさん：「でも、光が水槽の横から出ていかないからいいんじゃない」

レーザー光の角度を何度も調整して、自分たちで追究を進めて納得している姿がありました。

既習事項を確認する際、生徒が友だちとノートを見返しながら話し、実験に向け気持ちが高まっていく様子が印象的でした。子どもが「どうして？」と問いをもった時、それを解決するために、必要な既習事項が関連付けられることで見通しがもて、細部をおろそかにしない追究を、自分たちで粘り強く進めていくことができますね。



授業から学ぶ
特別支援教育



個に応じた支援を考える
～教材・教具の工夫～

中学校の自閉症・情緒障がい特別支援学級の授業において、生徒一人一人の学びやすさに応じた教材・教具の工夫等に取り組んでいるA先生の取組を紹介します。

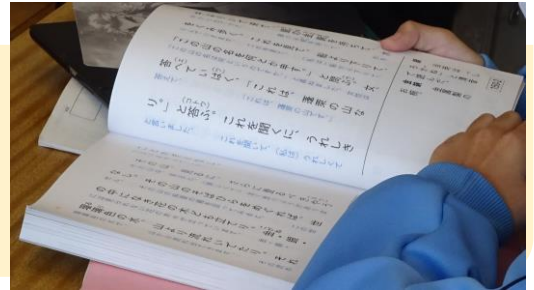
国語 1年「蓬萊の玉の枝～竹取物語から～」

A先生は、竹取物語の蓬萊の玉の枝の学習を行ってきた生徒たちが、くらもちの皇子が語った蓬萊山はどんな山だったか考える場面で、教科書の本文から山についての記述を手がかりにした学習活動を考えました。この授業でA先生は以下の工夫を行いました。



(1) 拡大教科書の使用

Bさんは、視覚に困難さがあるため、普段から拡大教科書を使用しています。通常の教科書の文字では、読むことが困難であっても、同様の内容が拡大された拡大教科書を使用することで、読むことに時間をかけることなく、自分で読み進めることができました。

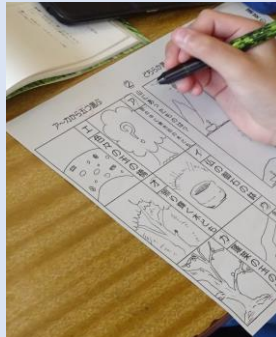


(2) 生徒の実態に応じた学習プリント

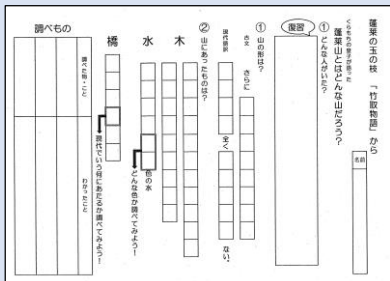
A先生は、本時、生徒が蓬萊山の情景について読み取り、まとめる際に使用する学習プリントを3種類準備しました。準備するに当たって、A先生が大事にしたのは、日々の生徒の得意なことや長所等です。それぞれの生徒が、自分の得意なことや長所を生かして学べる学習プリントを使用することで、自ら学習に取り組み、「自分でできた」が実感できる状況を作りたいとA先生は考えました。



①「絵中心」

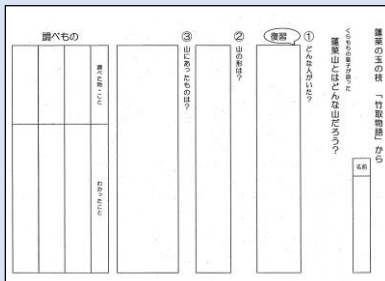


Cさんは、絵を描いたり絵から情報を得たりすることが得意な子です。「先生どう書くの？」と悩むCさんには、絵中心の学習プリントを使用しました。するとCさんは、プリントに描かれている絵と蓬萊山の様子が書かれていた叙述を照らし合わせ、山について書かれた絵を選んでいきました。



②「穴埋め中心」

あてはまるものを探したり考えたりすることが得意な子に

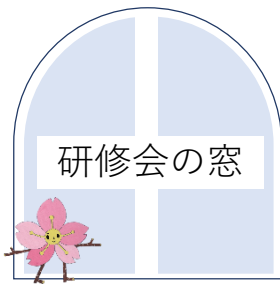


③「書き込み中心」

感じたことや考えたことを自分の言葉で表すことが得意な子に

これからも、子どもや学校の実態に応じて、教材・教具の工夫をし、個に応じた指導の充実が大切となります。特別支援学級のみならず、通常の学級においても、個に応じた支援を考えていきましょう。





研修会の窓

情報を共有し、つながりで支えていく ～第2回外国籍等児童生徒指導研修会～

11月に上田市立第一中学校で行われた会では、小中学校の先生方15名、児童生徒の日本語支援を行っている方10名、会場校の全職員にご参加いただき、参観した日本語教室や在籍学級の授業から気付いたことや、日ごろの悩み等、様々な視点で意見交換を行いました。

研究協議Ⅰ～授業参観～「友だちや先生の手助けの中で」



◆在籍学級での道徳の授業で、先生の発問に対し、ワークシートに自分の考えを書いたA生は、自信がないのか、グループ共有の際、ワークシートを隠すようにしていました。すると、同じグループのB生が「見せて」とワークシートを覗きこみ、A生の伝えなかった表現になるように「こういうことかな」と言葉を付け足していきました。その後、それが班の考えとして全体に発表されました。A生は仲間に認められたことを嬉しそうにしていました。

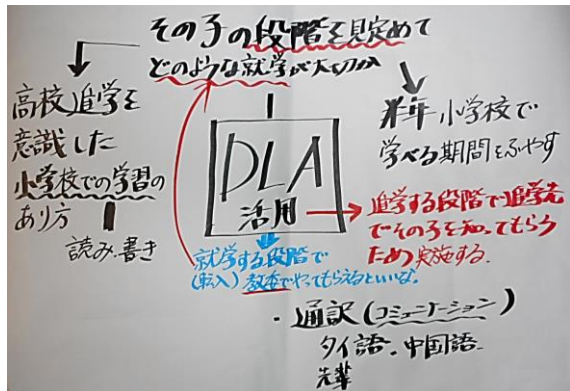
◆日本語教室の授業では、「～します」という表現を「～できます」に変える場面で、B先生は水泳の絵を見せ「何ができる？」と尋ね、子どもから「クロールができます」といった表現を引き出していました。C生は、先生や同じ日本語教室で学習する友だちとのやり取りの中で、「何だったかなあ…？」と考えながら表現を言い換えていきました。「言葉に詰まっても、先生や友だちが待ってくれる」、そんな安心感の中で学習が進められていました。

研究協議Ⅱ～情報共有～「縦横のつながりって大切ですね！」

◆今年度は、学校外で子どもたちに日本語支援をしている方々も大勢参加し、今後の連携の在り方を考える機会にもなりました。児童生徒により細やかな指導・支援を行うためには、日本語教室担当教員や学校だけで子どもたちを支援していくのではなく、①小学校と中学校、②日本語教室担当と在籍学級教員、③学校と外部機関での情報共有を欠かさず、縦横でつながって支えていくことが大切になります。

<参加者の声>

縦横のつながりでの情報交換はとても貴重でした。なかなか自分の学校以外の取組は、わからないことが多いので、このような機会はとてもよかったです。



◆あるグループでは、より適切な学習支援を行うための「DLA（児童生徒の日本語の能力を把握する対話型アセスメント）」の活用について意見交換をしました。参加者からは「高校進学まで見据えて適切に児童の学習支援ができるようDLAの活用について勉強したい」という感想が聞かれました。日頃の見取りとともにDLA等の診断を活用して子どもたちの実態を把握することも大切です。

参考：DLAに関する文部科学省のウェブサイト



第一中学校では、外国籍の生徒と在籍学級の生徒や教師との関わりを大切にしています。在籍学級での授業前に日本語教室で教材を扱っておいたり、絵図を利用して日本語の理解を深めやすくなるようにしたり、外国籍生徒が在籍学級の授業で自分の考えや思いを語れるように工夫をしています。



ICT活用 のススメ

1人1台端末は令和の学びの「スタンダード」

4月からは、どの学校でも1人1台端末が導入されます。その目的は何でしょうか。そして学びはようになっていくのでしょうか。



GIGAスクール構想（GIGA = Global and Innovation Gateway for All）とは

- ☞ 1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、特別な支援を必要とする子どもを含め、多様な子どもたち一人一人に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できるICT教育環境を実現する
- ☞ これまでの我が国の教育実践と最先端のICTのベストミックスを図り、教師・児童生徒の力を最大限に引き出す

これまでの
教育実践の蓄積

× ICT =

学習活動の一層の充実
主体的・対話的で深い学びの
視点からの授業改善

【文部科学省資料より】



1人1台端末を用い、教育クラウドの活用によってできそうなこと

- 個別** 一人一人の教育的ニーズや・理解度に応じた個別学習が可能に
- 一斉** 教師は授業中でも今まで以上に一人一人の反応を把握できる
- 協働** 各自の考えを即時に共有し、共同編集ができる

※教育クラウド…インターネット上にある、コンテンツ（動画や資料）や教育向けのオンラインサービス。教師がアンケートシートやホワイトボードなどを授業にあわせて工夫して作成することができる。

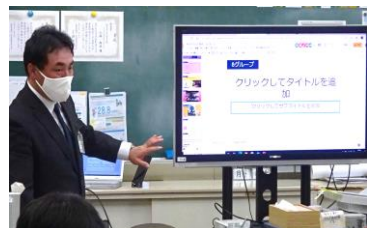


研修、サポートします

今年度の「出前講座」では、先生方に教育クラウドを体験していただきました。「通信環境は円滑に整うのか」「セキュリティは大丈夫なのか」「私にも使いこなせるのか」など、初めてのことばかりで戸惑いの姿もたくさん見られました。けれどもその中で、一斉アンケートを即時に集計してグラフ化したり、一人一台の端末からクラウド上のシートに一斉に入力をしながら討論をしたり、職員一人一人の意見を自由に閲覧したりなどの体験を重ねていくと、授業での活用のイメージが沸き上がって語り合う様子も見られてきました。

一人一台端末の導入は、新たな教育内容が加わるということではなく、情報を素早く正確に整理し、情報の把握を快適にするとともに、理解を助けることができる教育ツールの導入です。

使い慣れることは必要ですが、まずは、子どもたちと共に体験を重ねていきながら、一人一台端末の良さを生かし、教育クラウドの効果的な活用について、考えていきましょう。



今や仕事でも家庭でも、社会のあらゆる場所でICTの活用が日常のものとなっています。子どもたちにとっても、端末は鉛筆やノートと並ぶ必要な道具です。その道具をどう活用していくか、引き続き先生方と共に考えていきたいと思えます。

（教育指導時報1月号から連載で各教科での活用例が掲載されています）



考える 部屋

ともに考え進んでいく ～単元訪問を振り返る～

東信教育事務所では、学校訪問支援において「子どもの学びを価値付けて、学校全体の授業改善につなげる訪問」になるように努めてきました。今年度の学校訪問支援の事例として、南牧南小学校の単元訪問を振り返ります。



研究主任
【杉木先生】



授業者
【中野先生】



南牧南小学校 体育研究会のから要請内容

コロナ禍において、少ない時間数で高い学習成果を得るために1時間の中で2つの単元（マット運動・跳び箱運動）を扱う組み合わせ単元に挑戦してみたいと思っています。そのためにどんな単元展開や授業展開にしたらよいのでしょうか。

※組み合わせ単元…1時間の授業を時間で区切り、二つの運動（単元）を行う



1回目：授業参観・部会との懇談

◎体育授業で大切にすることや、組み合わせ単元を構想する目的について確かめる。

【指導主事】

「マット運動と跳び箱運動それぞれの山頂のゴール（単元の目標）は明確になっていますか？」

【授業者：中野先生】

「まず、それははっきりさせなければいけませんでしたね」

【部会主任：杉木（そまき）先生】

「組み合わせ単元をすることは、目的ではなく、ねらいの実現に向かう手段なんですね」



2・3回目：メール、電話での相談（2回）

◎指導主事のヒントをもとに、部会で子どもの思考にあわせた単元展開を考える

【杉木先生】

「組み合わせ単元の単元展開の流れは適切でしょうか」

【指導主事】

「子どもはどう考えますか？ 子どもを中心にすると考えると、本時ではマット運動と跳び箱運動のどちらを先にやるのが適切になるでしょうか。それを考えるには、その前時までの子どもの思考にヒントがありそうですね」



4回目：授業参観、懇談、全校研究会

◎成果と課題を振り返り、『子どもと共につくる授業』について、改めて考える

【中野先生】

「実際にやってみると運動量の確保の難しさがわかりました」

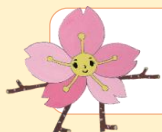
【指導主事】

「確かに、タブレットで毎回試技を撮影したので、全体的に運動量が少なくなっていましたね。しかし、子どもと共に学習課題を設定したことで、課題追究の見通しをもってそれぞれの練習をすることができていました。組み合わせ単元は、それぞれの運動時間が短くなりますが、それぞれの目標を明確にして、効果的な練習を子どもたちと考えることが大切になることがわかりますね。」

【中野先生】

「今回の組み合わせ単元の授業づくりを通して、改めて『子どもと共につくる授業とは何か』を考える機会になりました」





～単元訪問をおえて～インタビュー
「みんなでつくったもの（授業）を子どもにプレゼントする」



——今回の授業づくりについて、どんな感想をおもちですか？



杉木先生：中野先生に任せっきりせず、部会のみんなで授業をつくることを心掛けました。

中野先生：そのおかげで研究部会のチームの力で授業をつくることができました。本時では、子どもたちが自分たちで技のポイントを探しましたが、私もその中に入って子どもと一緒に考えていくことができました。45分があっという間でした。

——部会主任の杉木先生をはじめ、まわりの先生方の存在は大きいですね。

中野先生：杉木先生によく「チームだろ」と声をかけてもらいました。そのおかげでみんなでつくった授業を子どもにプレゼントすることができました。このような研究ができて、この学校に来てよかったなと思いました。

——指導主事とのメールや電話相談等を含めると、合計4回授業づくりに参加させていただいたこととなりますが、率直な感想をお聞かせください。

杉木先生：1回だけの訪問ではないので、部会で課題や疑問が出たところで何度も教えていただくことができたことが大変ありがたかったです。また、単元を山に例えて、単元の目標を山頂のゴールとして説明してくれたことが私も中野先生もしっかりきて分かりやすいものでした。

中野先生：メールの返信もうれしかったです。また「～してください」ではなく、主事先生の投げかけがヒントを含んだものだったので、「ここは自分たちで考えなくてはいけないのだな」と受け取りました。そのヒントをもとに部会で考えることができたのはとてもよかったと思いました。

——単元訪問でもっとこうしてほしいなど、ご要望はありますか？

杉木先生：1回目の訪問要請を、抽象的な支援内容で要請してしまいました。そのことも含めて1回目の訪問の前に、もう少し主事先生に自分たちの考えていることや願いなどを伝えておく必要があるなと感じました。

中野先生：もっと子どもたちの実態を知ってもらえる時間があればよいと思います。また、単元構想の段階でヒントをたくさんいただくとありがたいです。

——ヒントとはどのようなことですか？

中野先生：授業づくりに向けて選択肢を広げたいなと思っています。私たちは引き出しが少ないので、整った指導案の例ということではなく、他校の実践例など授業づくりの参考になるパーツ（用具の活用、場の活用など）がほしいなと思っています。

.....

インタビューを通して、指導主事が考えるヒントを提示し、杉木先生を中心にしたチームで単元展開を練り上げたことで、中野先生は授業づくりに手応えを感じられたのではないかと思います。教頭先生のアンケートからは、「本校の職員の気持ちが『より子ども中心の授業をつくりたい』に変化し、『教える』のではなく、『ともに考える』という方向で動き始めました」という感想をいただきました。

令和2年度学校訪問支援実施状況（1月末現在）

(1) 単元訪問	233回
(2) ゾーン訪問	75回
(3) その他の訪問	133回
★3種類の訪問の内	
・信州型UDにかかわる支援	23回
・研究主任との懇談、支援	92回
・初任者にかかわる支援	124回
・講師にかかわる支援	55回
・ICTにかかわる支援	23回

今年度は、東信管内全ての学校から訪問要請をいただきました。ありがとうございました。来年度も、授業づくり等をきっかけに、学校全体の授業改善が進められるように、「ともに考える」ことを大切にしながら、先生方に伴走した支援をしていきます。

